

書評：田中弘『国際会計基準はどこへ行くのか』

(時事通信社／本体 2000 円＋税)

駒澤大学教授 石川純治

この本には「読ませる力」がある。なぜそのような「力」があるのか、評者はそれを常に意識しながら、最後まで一気に読んだ。それは随所にみられる巧みな比喻や皮肉あるいは内幕話などを交えた筆の力もそのひとつだが、それだけではない。むしろ、そうした表現力を支える「見える(洞察する)力」だろう。

その一端を紹介すれば、まず冒頭から『国際会計基準』——声に出してみてください。何とも心地よい響きをもったことばではないでしょうか(はしがき)とある。この何とも巧みな皮肉こそ本書を象徴する言葉といえる。

また、米国基準をして不正問題を対症療法的に解決する「火消し基準」と喝破し、それを『世界で最も進んでいる』と勘違いし、必死になって日本に導入しようとする。その最たるものは時価会計基準である(41 頁)と皮肉る。目下の争点の「連結先行」論については、IFRSを巧みに「路地裏のスポーツカー」にたとえ、「路地裏でスポーツカーを走らせるようなものである。路地(個別財務諸表—評者)が破壊されるか、スポーツカー(IFRS—評者)が走れないか、どちらかあるか」(212 頁)と痛烈に批判する。

もう1つ、最たる批判の矛先である時価会計をどう見ているか。著者はIFRSの時価会計を、もともとどこの国も使わないという暗黙の了解の下に設定された基準(居直り続

ける「暫定基準」)であるとその出自を明らかにし、「基準設定における時価主義者のごり押しや基準設定にまつわる内幕話を知れば、時価会計の国際基準がいかにも素性の怪しいものであるか、きっと驚くであろう」と断じる。そして、その「素性の怪しい」時価会計基準を「グローバル・スタンダードだと勘違いして自国基準に導入したのは、悲しいことに日本であった」(104 頁)と揶揄するあたりは、時価会計反対論者にはたまらないだろう。

本書には、会計以外の書物の引用が随所ででてきて、著者の読書家ぶりがうかがえる。政治化する会計を読み解くには、もはや会計の本の中だけでは見えてこない。「見える力」の源泉のひとつはそのあたりにありそうだ。

著者は7年前のベストセラー『時価会計不況』(新潮新書、2003 年)で時価会計を「魔法の妙薬」ではなく日本経済を破壊する「劇薬」のようなものだと断じたが、本書にもそのスピリッツが脈々と流れている。国際会計基準の正体(真相)は何か、それはどこから来て、どこに行くか。なぜ、日本に必要なのは「立ち止まる勇氣」、「足踏みする勇氣」なのか。国際会計基準の表の面(光の部分)ではなく、むしろ裏の面(影の部分)を知りたい読者には本書は格好の書物といえる。

(『週刊経営財務』平成22年11月29日号に掲載)